

2014年7月14日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

## 1. 資料の補足

下記の文献[Vũ 2014: 29][Hông 2014: 44-45]により、いくつかの資料の見落としに気づいたので、ここに補足する。

200-i 『大南寔録前編』巻 8、10b、辛卯二十年（1711）夏四月条（慶應義塾大学言語文化研究所刊行影印本、p.114.）

河僊鎮総兵鄭玖詣闕謝恩。上厚賞之。命度長沙海渚長短広狭之數。

200-ii 『大南寔録正編』第一紀巻 22、2b、嘉隆二年（1803）秋七月条（慶應義塾大学言語文化研究所刊行影印本、p.628.）

以該奇武文富為沙祈海口守禦。令募籍外民立為黃沙隊。

200-iii 『大南寔録正編』第一紀巻 50、6a、嘉隆十四年（1815）二月条（慶應義塾大学言語文化研究所刊行影印本、p.917.）

遣黃沙隊范光影等往黃沙深度水程

シャム湾岸のカンボジア・ベトナム国境地帯に小貿易王国を築いた華人鄭玖が、メコンデルタ方面への進出を目指していた阮氏政権に帰順したことは周知のとおりであるが、200-i の記事から阮氏政権が彼に「長沙海渚」の調査を命じたことが知られる。「長沙海渚」がどこを指すのかは明確ではないが、パラセル諸島、スプラトリ諸島方面のどこかであったと考えても不自然ではあるまい。少なくとも南シナ海交易勢力の海域に関する知識や航海技術を阮氏政権が積極的に利用しようとしていたことが示されている。

200-ii の記事は阮朝が王朝創設の翌年に早くも黃沙隊の復活再編に着手したことを示しており、阮朝が阮氏政権以来のパラセル諸島方面へ深い関心を継承していることは明らかである。

本文では、1816年に阮朝がパラセル諸島の調査を行い、フランス人宣教師 Taberd がそ

の出来事を阮朝による領有権の確立とみなしたということを記した。200-iii からは、阮朝がその前年にもパラセル諸島への調査を行っていたことが知られる。1815年、1816年と二年連続でパラセル諸島の調査を実施していることから、この時期に嘉隆帝がパラセル方面により深い関心を寄せるようになったことが窺える。ただ、なぜこの時点でパラセルが問題となったのかについてはさらに検討の必要がある。

Vũ Minh Giang. 2014. “Căn cứ khoa học về chủ quyền của Việt Nam trên hai quần đảo Hoàng Sa và Trường Sa.” *Văn thư Lưu trữ Việt Nam* 5-2014.

Hồng Chuyên. 2014. “Hoàng Sa, Trường Sa của Việt Nam- góc nhìn theo tiến trình lịch sử (Vài phút trao đổi cùng GS.TS Nguyễn Quang Ngọc)” *Văn thư Lưu trữ Việt Nam* 5-2014.

## 2. 地図資料の描写

本稿の主眼は漢文文献の記述を考察することにあるが、前近代の中国・ベトナムの地図資料の中の南シナ海方面の描写の仕方についても触れておきたい。予備的考察であり、さらなる精査が必要であることを予めお断りしておく。

### 2-1 中国資料

#### ① 『大清萬年一統地理全圖』（京都大学附属図書館蔵）

サイズは133cm×231cm（横に長い）、二色刷り（青色が基調）の一枚ものの地図である。地図中の説明書きによれば、乾隆丁亥（1767）に黄千人が作成した天下輿図を増補したものである。増補の年次は記されていないが、「其時金川・西藏・新疆州郡未經開闢」ということが増補の理由に挙げられているので、乾隆帝の四川、チベット・ネパール方面の軍事行動が一段落した18世紀末以降のことではないかと推測する。『大清萬年一統地理全圖』という名称が大書してあるほかに、地図の右端に、「大清一統地理全圖一～八」という名称が小さく記されている。正確さを追求した地図ではなく、天下の構成諸要素（中国の版図および周辺諸国）のおおまかな配置を示すものである。

この地図の特徴は中国の版図だけでなく周辺諸国が描写されていることである。左上の端には、「荷蘭国」「英吉黎国」まで描かれている。地図の右端の下半分から地図の一番下の部分にかけて、東シナ海から南シナ海にかけての海域が描かれている。そこには中国に朝貢してきた国々とそれらの国々への航路が描かれている。中国沿岸の航路、フィリピン方面に向かう航路、ベトナム沿岸からシャムに向かう航路、インド方面に向かう航路、スマトラ・ジャワに向かう航路が描かれている。東南アジア諸国に関する地理認識はかなり不正確であり、ジャワ島、スマトラ島、ボルネオ島といった現実の島々は描かれておらず、中国で名の知られている国や都市をそれぞれ一つの島として描写している。それらの位置関係も正確

ではない。

「萬里石塘・萬里長沙」は連続した区域として、広東から福建に向かう沿岸航路とスマトラ・ジャワ方面に向かう航路の中間に明瞭に描かれている。この地図はおおむね上を北、下を南として記述しているが、インドシナ半島はそうではなく、地図の左下に右（＝北）から左（＝南）に伸びるように描かれている。その結果、インドシナ半島の東海岸は地図下部左方に水平に描かれ、その右側、地図下部中央に「萬里石塘・萬里長沙」があるという配置となり、「萬里石塘・萬里長沙」とベトナムが全く無関係であるという印象を与えるような構図となっている。

## ② 『大清一統天下全圖』（国際日本文化研究センター所蔵）

サイズは112cm×67cm（縦に長い）の一枚もので多色刷りである。康熙年間に印刷されたものを嘉慶23年（1818）に朱錫齡が増補して印行したと記されている。最上部の囲みの中に各省の概略が記されている。この地図も①と同様、正確なものではなく、天下の構成諸要素をおおまかに配置したものである。少なくとも東シナ海から南シナ海にかけての描写に関しては①と同系統の地図表現をしているといえる。ただし、細部は異なっており、フィリピン方面に向かうルートは、中国からではなく、ジャワ方面から繋げて描かれている。

「萬里石塘・萬里長沙」およびインドシナ半島の描き方は、①の地図とほぼ同じである。

## ③ 『大清一統輿圖』三十一卷、同治二年（1863）（東洋文庫所蔵）

上記二者と異なり、正確さを重んじた詳細な地図帳である。天下ではなく中国の版図の情報の集約を目指したものであり、東シナ海・南シナ海方面については主要な朝貢国である朝鮮、琉球、ベトナムに関する付図を除いて記述がない。東南アジアの島嶼部やそこへの航路の描写は含まれず、「萬里石塘・萬里長沙」も表現されていない。南シナ海にあたる部分の図はこの地図帳の中には存在しない。

これより、上の二種の地図において、「萬里石塘・萬里長沙」が明記されていたのは、それが版図の一部とみなされたからではなく、南シナ海方面の海上ルートの重要な付属物とみなされたからであると考えられる。

## 2-2 ベトナム資料

### (1) 『大南一統輿圖』（東洋文庫所蔵）

全国図および各省の地図と概観からなる。刊本は作られず写本のみであり、東洋文庫には4点の写本が蔵されている（うち2点は極東学院所蔵本の写真版）。このうち請求記号 Y-X-2-40 の写本のみ、嗣徳14年（1861）の国史館総裁の前書きが無く記述内容も若干異なっているので、これを除く3点の全国図の描写について考察する。三つの写本の地図の描写は概ね一致しており、原型を伝えているのではないと思われる。

ベトナム中部・南部沿岸は次のように描写されている。海岸線の海側（海中部分）に河口名が帯のように海岸に沿って記されている。その沖側に5つの群島がある。一番南側の島には「崑崙山」と記されている。まず注意すべきは、地図表現が未熟であり正確さとは程遠いということである。特に海域に関してはそうであり、縮尺・サイズ・距離は実際とは乖離している。フエからハノイまでの距離が10cmで描かれているのであるが、「崑崙山」は最長部分が2.5センチもある。その他の群島の主要な島も1cm前後である。島の存在を強調しようとしたのかもしれないが、異様ではある。この「崑崙山」は明らかに *pulo Condor* であるから、これらの群島は本文で *pulo-cù lao* 列と呼んだものに相当するようにも見える。ところが、一番北の広義沖の群島だけは他の群島とは描き方が異なっている。二つの大きい丸の中に小さい丸が3つ乃至4つ書き込まれている。*pulo-cù lao* 列の島々とは異なるパラセル諸島の珊瑚礁海域を表現したものではないかと思われる。正確には *pulo-cù lao* 列はより海岸に近く、パラセルはより遠くに描かれるべきであるが、距離感の認識が曖昧であった、或いは、地図表現の技法が稚拙であったために、両者が同じ並びに描かれることになってしまったものと思われる。しかし、この地図の作成者あるいは筆写者が、広義沖に *pulo-cù lao* 列の島々とは異なるタイプの島々があることを認識していたことは明らかであろう。また、それを *pulo-cù lao* 列と同様にベトナムの国土に附属するものとみなしていたこともこの表現から窺うことができるのではなかろうか。

## (2) 『啓童説約』（嗣徳34年[1881]霊山寺蔵板）中「本國地図」

児童向けの初学教科書に付された地図であり、やはりその表現は稚拙である。ただ、中部南部海域の描写は特徴的であり、注目に値する。広義沖の海中に丸が描かれ、その中に「黄沙渚」と記されている。他の島々は一切描かれていない。「黄沙渚」のみが海中で強調されている。パラセル諸島とベトナムとの間に深い関係があるという意識を表現していることは間違いあるまい。

『啓童説約』については下記参照。

嶋尾稔. 2012. 「ベトナム阮朝期初学テキストの中の国土・国史：『啓童説約』の検討」山本正身編『アジアにおける「知の伝達」の伝統と系譜』（慶應義塾大学言語文化研究所）

## (3) 『大南一統全圖』

この地図では、ベトナム中部沖合に30前後の島々が描かれ枠で囲まれており（ヨーロッパの想像のパラセルの図とも若干似ている）、「黄沙」「萬里長沙」と明記されている。ベトナムの諸文献にパラセル諸島・スプラトリ諸島が古来ベトナムの領土であったことの証拠としてしばしば引用される地図である（[Nguyễn 2013: 227]など）が、資料に関する詳細は不明である。ベトナム外務省によれば、1838年成立の資料であるとの事である、[Ministry of Foreign Affairs National Boundary Commission. 2012: 18]が、筆写年は不明であり、写本も一つしかないように見受けられる。『大南一統全圖』の描き方とあまりにも異なっていることや19世紀段階の

ベトナム資料ではあまり見かけない「萬里長沙」の語が使われていることなどからして、取り扱いには慎重を期すべき資料である。

#### (4) 『大南疆域彙編』中の地図

『大南疆域彙編』は保護国化直後にベトナムの領域を示すために作られた地誌であり大変重要なものであるが、まだ検討していない。今後の課題である。

### 2-3 ヨーロッパ資料

問題を一つだけ指摘しておきたい。1838年に宣教師 Taberd が刊行した地図に関する疑問である。この地図もベトナムの諸文献がしばしば引用する資料である（[Nguyễn 2013: 226、カバー裏]など）。この地図に関する問題点は、Taberd 自身の地理的記述と一致していないことである。Taberd の記述では、Paracel は北緯 11 度、東経 109 度まで広がっているはず（想像の Paracel を念頭においている）なのであるが、この地図ではそうになっていない。この地図では Paracel の西の端がぎりぎり見えているだけであるが、そこは北緯 16 度のやや北、東経 111 度あたりである。むしろ実際のパラセルを表現しているようである（Triton island は  $15^{\circ} 47' N$ ,  $111^{\circ} 11' E$ ）。Taberd の頭の中に想像の Paracel の記憶と実際のパラセルの知識が混在していたのかもしれない。あるいは、地図の作成に Taberd が関与していない可能性も考えられよう。これも今後の検討課題である。